

自分で守ろう！ 自分のからだ！

平成22年度第4回すこやか健康講座が2月11日、市交流センターで開かれ、市民ら約120人が参加し、子宮頸がんや子宮体がん、卵巣がんについて理解を深めました。



女性のがんを学ぶ

講座は、市民の生活習慣病予防など健康づくりを目的に開かれているもので、毎回テーマを変え、年5回開催しています。今回は、秋田赤十字病院の大山則昭・第三産婦人科部長が「女性のがんについて」子宮頸がん・子宮体がん、卵巣がんについて」と題し、講演しました。

女性特有のがんとしてよく知られているのは、子宮頸がん、子宮体がん、卵巣がんの3つ。

子宮頸がんは、子宮の入り口付近の子宮頸部にできるがんで、原因はヒトパピローマウイルス（HPV）というウイルスの感染であることが明らかになっています。多くの場合、性交渉によって感染すると考えられ

子宮頸がんには ワクチン接種が有効

「発がん性HPVの感染は、ほとんどが子宮内から排出され一過性ですが、何度でも感染を繰り返す。HPVは、約100種類ありそのうち15種類ほどが子宮頸がんの原因となる『発がん性HPV』と呼ばれている。さらに16型と18型と呼ばれる2種類が、発がん性HPVの約6割を占めている。予防ワクチンは16型と18型をほぼ100%防ぐことができるので、3回接種することで十分な効果が得られる。また、性交渉前の女兒に接種した場合は、さらに有効である」と原因とワクチンの有効性について説明しました。

早期発見には 検診の受診が大切

また、子宮体がんについては「閉経後に発症のピークがある。月経以外の出血や閉経後の出血が認められた



市民ら約120人が参加し、女性のがんについて学んだ「すこやか健康講座」

普段の検診では 検査していないの？

質疑応答では、市民から「毎年、人間ドックで子宮がん検診を受けているが、頸がん、体がん、卵巣の検査もしているのか」との質問がありました。

大山部長は「各々の病院によって、検査の内容は違うが、腹部の超音波

であり、女性の約80%が一生に一度は感染していると報告があるほど、とてもありふれたウイルス。このため、性行動のあるすべての女性が子宮頸がんになる可能性を持っています。

子宮体がんは子宮内膜がんとも呼ばれるように、胎児を育てる子宮の内側にある子宮内膜から、がんが発生する病気で、

卵巣がんは、卵巣にできる腫瘍から発生するもので、最も多いのは、卵巣の表面をおつ細胞に由来する上皮性腫瘍で、この中には良性腫瘍と悪性腫瘍（がん）のほか良性、悪性の中間的な性質をもつ腫瘍があります。上皮性腫瘍はさらに5つの細胞型に分かれ、それぞれ異なる性格をもっています。上皮性のがんは卵巣がんの90%を占めています。

子宮頸がんは 年間8千人が発症

大山部長は「子宮頸がんは、すべての年代の女性に起こる可能性があるがんで年間約8000人が発症し、約2400人が死亡しており、20代から30代で急増しているのが特徴。また、世界の先進国の同がん検診受診率は70%から80%に対し、日本は

（エコー）検査を実施している場合は、子宮と卵巣の状態も確認している」と答えていました。

また、市の担当者からは「北秋田市では、子宮頸がんと卵巣腫瘍の検診を実施しています。早期発見のため、ぜひ受診してほしい」と呼びかけました。

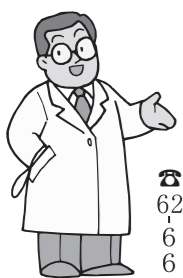
第5回すこやか健康講座 ーがん向き合っ 医療現場からー

今年度の最終回となる「すこやか健康講座」です。皆様お誘い合わせのうえお越しください。

期日 3月16日（水）
時間 13時30分～15時
場所 保健センター
演題 「いい日旅立ち
〜静かに逝きましょ〜」

講師 福田光之氏
（中通総合病院院長）
※合川・森吉・阿仁地区から
バス送迎があります
（要申込み）

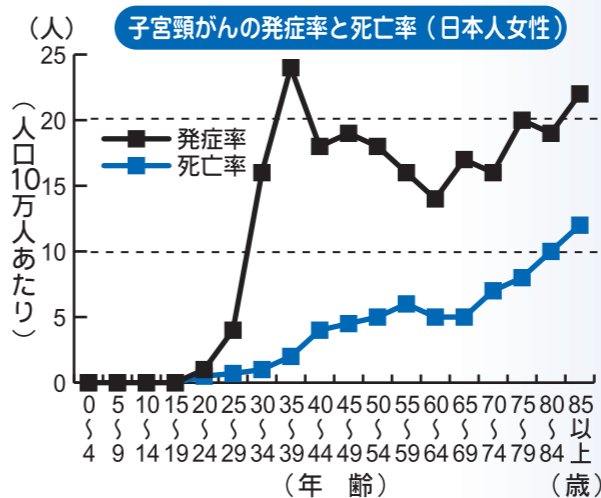
問合せ 健康推進課
☎62-6666



自殺予防 いのちのコンサート

3月1日は「秋田いのちの日」です。「秋田ふきのとう県民運動大会」において定められた「いのちの日」にちなみ、「自殺予防 いのちのコンサート」を開催します。市民の連携により、安心して生活できる自殺の無い地域づくりのために、多くの市民の参加をお願いします。

- ◆日時 3月6日（日） 午後1時（開場：12時30分）
- ◆場所 北秋田市文化会館 ◆対象 一般市民
- ◆内容 ①講演 演題「今笑えなくてもいいよ 笑えるその日が来たら一緒に笑おう」
講師 シンガーソングライター 大西 徹 氏（うつ病を克服し、活躍中）
②コンサート 参加団体：秋田県民生協会、大野岱吉野学園音楽クラブ、朗読ボランティア
やまびこ、コールつくしんぼ、新佐久さんと仲間たち
- ◆お問い合わせ 精神保健福祉ボランティア 小坂和子 ☎62-2625



20%ほどで、その中でも20歳代の受診率が特に低い」などと発症と検診の関係についてを説明しました。



▲女性のがんについて、分かりやすく解説する
大山則昭・秋田赤十字病院第三産婦人科部長